

「いのちの教育」と動物飼育活動

～「いのちの教育」を教育課程の基盤に置いた教育実践から～

1. 研究主題

いのちの大切さを自覚し、よりよい生き方を目指す児童の育成

～ 新しい学習指導要領が求める道徳教育の実践 ～

2. 研究主題設定の理由

研究主題を上記のように設定するに至った経緯は、社会の現状と児童の実態の関連について述べることより始めたい。

現在の社会の状況に目を向けてみると、様々な社会問題が露見される。本校ではそれらの社会問題と児童の教育を関連させて分析し、次の4つの点を主な問題点として考えた。

第1に、社会全体のモラルの低下である。胸を痛めるような事件が日々報道され、大人だけでなく青少年に関わる犯罪も悪質化している。特に犯罪の凶悪化、低年齢化は深刻度を増し、我が国の潜在的な不安要素として、火急に対策を講じなければならない段階にまで達している。なぜこのような状況になったのか。その根底には、生命軽視の風潮があるのではないかと考える。

第2に、家庭や地域社会の教育機能の低下である。現在の日本は核家族化が進み、共働きの家庭も多い。この家庭観の変化は時代の必然とも言えるので、もちろん肯定的な見方も十分にある。しかし、実際問題としては、家族間でのコミュニケーション不足や教育機能の低下が大きな問題点として挙げられる。一般論ではあるが、基本的なしつけが未定着なまま成長した児童は、善悪の判断がうまくできず、思いやりの心が弱体化してしまう傾向にある。

第3に、社会体験、自然体験の不足である。家族間だけではなく、地域社会に目を向けてみても、人とかかわりは急激に希薄化しているのが実態である。人とかかわることで得られる多くの有意義な経験が、祖父母や親の代と比べると、絶対的に少なくなっている。また、自然とかかわりも同様である。土地利用の変化に伴う自然環境の減少もその一因であるが、生き物との交流経験も減少している。多種多様な生

き物の存在、あるいはそれらの生命活動に、目を向けたり、関心を示したりするという自然体験そのものが、現代では稀少な体験なのかもしれない。

第4に、社会の変化に伴う課題の拡大である。その利便性と高い普及率で社会を劇的に変えたメールやインターネットは、情報化社会において、この上ない恩恵を我々にもたらした。反面、児童の教育という分野においては、必ずしも恩恵ばかりではない。例えば、匿名を名乗って掲示板に友達を中傷する書き込みをする事例。また、裏サイトと呼ばれるものは無法地帯の様相を呈しており、生命や人権を軽視するような書き込みが頻発しているものも少なくない。自分の姿を隠すことによって、他者の尊厳や存在意義に対する価値観を欠落させてしまうようだ。

以上のような、社会の現状と児童の実態の関連を考えると、子どもたちを取り巻く教育環境は必ずしも盤石なものではない。今後も新たに巻き起こる諸問題と、一人ひとりが適切にかかわっていかなければならない。自分はもちろん、他者も大切にしなければいけないという正しい生命観、価値観を、児童の心の中に築かなくてはいけない。そのためには、自分自身をじっくりと見つめ直し、「いのち」について深く考える「道徳教育」の充実こそが必要であると考えます。

そこで、本校は目指す児童の姿を、「自らの生命を大切にするとともに、他者の生命も尊重しながら、生命のかけがえのなさに気づき、よりよく生きていこうとする児童」と設定した。

3. 研究主題の捉え方

生命尊重の概念を説くときに第一に捉えておかねばいけないことは、学校全体の中で確固とした生命観を共有することである。その生命観は、全教職員が等しく持っていなければならない。その上で、子どもにはぐくませたい生命観を確立し、「なぜ、いのちは大切なのか」と問いかけることが必要である。

「いのち」の本質とは、それ自身が自ら生きよ

う、成長しようとする力であると考えられる。身のまわりの景色に目を向けてみれば、道端に咲く草花や木々に芽生える若葉、あるいはそこを棲み家とする小さな昆虫たちも逞しく生きている。その他の生物界で行われる生命の営みからも分かることである。

また、「いのち」はその誕生自体、進化の歴史から見ても、いろいろな条件が複雑に絡み合っ
て誕生したと言える。つまり、「いのち」には神秘性や偶然性があり、そして、いつかは必ず死が訪れるという有限性のあるものでもある。また、すべての「いのち」は他の「いのち」と密接な繋がりを持っており、何らかの関係性を有している。互いが影響を与えたり、受けたりしながら、有機的な「いのち」の連鎖の中で共生している。「いのち」を失うことは、その連鎖を断ち切ってしまうことになり、その個の存在が永遠に失われることを意味する。

以上のように、「いのち」を一面からではなく多面的に見ることによって、「いのち」の本質により迫っていくことができ、「いのちの大切さ」を捉えることができるのではないか。そのことによって、「かけがえのない生命」という確かな認識を、子どもたちにはぐくむことができると考える。

また、どの生命体にも等しく死は訪れるという必然の中で、あえて「よりよい生き方」というものを考えていくことが大切である。わたしたちの一生は、単に死に向かっていくための生ではない。その限りある一生に、それぞれの「いのち」を最大限に輝かせ、自己の存在意義を十分に見出すことである。また、自己の存在意義だけでなく、自分を取り巻く社会の存在にも気付き、他者の存在意義も認め、尊重できる生き方も目指していかなくはない。社会の中で、自己のよさや課題を発見しながら、責任をもって生きていくことも、「よりよい生き方」には不可欠の要素であると考えられる。

いのちの大切さを自覚し	生物的な「いのち」として捉える。 あらゆる生命体を持っている 「いのち」であり、次のような四面性があると考えられる。 ①支え支えられている生命 (共存性・共生性) ②はかない、一回限りの生命 (有限性・唯一性) ③自然的、生物学的存在としての生命 (神秘性・偶然性) ④受け継ぎ、受け継がれている生命 (連続性・継続性) 以上の四面性から「いのち」について迫っていくことで、いのちの持つかけがえのなさ、大切さを自覚させていく。
-------------	--

よりよい生き方	精神的な「いのち」として捉える。 人間だからこそ感じることのできる 「いのち」であり、限りある「いのち」を最大限に輝かせ、よりよく生きていこうとする考え方や態度のことである。つまり、自分の夢や目標に向かって、前向きに力強く生きていこうとする姿である。また、他にも、基本的な生活習慣や規範意識を身につけ、社会の一員としての役割や責任を自覚することも、自己のよさや課題を発見しながら、よりよく生きていくためには不可欠な要素であると考えられる。
---------	--

4. 研究仮説

かけがえのない「いのち」がもつ多面的な性質をおさえて全学年で指導するとともに、低学年では「基本的な生活習慣の育成」、中学年では「規範意識の醸成」、高学年では「社会や集団の一員としての役割と責任」を、指導の重点として各教科や領域等で計画的に扱えば、自己のよさや課題を発見しながら、よりよく生きていこうとする児童が育つ。

5. 研究の方法

(1) 基礎研究

- ・先行研究及び文献研究を通して、道徳の時間の基本的理解を定着させると共に、「いのちの教育」の進め方と研究の視点についての共通理解を図る。
- ・新学習指導要領を視野に入れて指導内容の重点化を図り、「総合主題構想に基づく道徳教育」についての研鑽を進める。

(2) 実践研究

- ・平成20年度は、低、中、高学年の分科会ごとに1本の研究授業を実践し、総合主題との関連性や指導法について仮説を検証し、研鑽を深める。
- ・平成21年度は、学級担任全員が研究授業を行い、授業力の向上を図ると共に、その授業について分科会を中心に仮説を検証する。
- ・一つの分科会の授業を、他の分科会も計画的に参観して、全体的な交流と研究の統一化を図る。

6. 研究の内容

◇研究主題に迫るために、次の4つを研究の柱とする。

生命の多面的な捉え方

総合主題構想に基づく道徳学習の構築

道徳の時間の工夫

教育活動全般にわたる道徳教育の実践

研究主題に迫るために、総合主題構想に基づく道徳学習を構築し、教科・領域等の内容の精選を行う。また、生命に対する畏敬の念をはぐくんでいくために効果が上がるように、内容の関連を図っていく。

道徳の時間は、総合主題構想に基づく道徳学習における中核ともいえるものである。様々な教科・領域で学習内容を補充・深化・統合して

いくのが道徳の時間である。よって、この道徳の時間における指導法や学習内容の工夫等を行うとともに、総合主題構想に基づく道徳学習において計画された道徳の時間の価値項目の配列を重視する。

◎生命の多面的な捉え方

- ・「生物的ないのち」を捉えるために、いのちのもつ4つの性質（「共存性・共生性」「有限性・唯一性」「神秘性・偶然性」「連続性・継続性」）を理解する。
- ・いのちの性質を踏まえて生命尊重に関わる資料を分析し、6学年を通して系統的に指導する。
- ・「精神的ないのち」を、よりよく生きていこうとする考え方や態度として捉え、総合主題構想に基づく道徳学習で具現化する。

◎総合主題構想に基づく道徳学習の構築

- ・発達段階に応じて、低、中、高学年ごとに、2学年にわたって共通した総合主題を設定する。
- ・低、中、高学年の総合主題を視野に入れ、道徳の時間を要としつつ、各教科、領域等との関連性を図りながら、有機的な道徳学習を計画する。
- ・2学年にわたり合計4つの学年主題（各学年、前期、後期に各1主題ずつ）の構想案を作成し、児童の実態を考慮しながら実践する。

◎道徳の時間の工夫

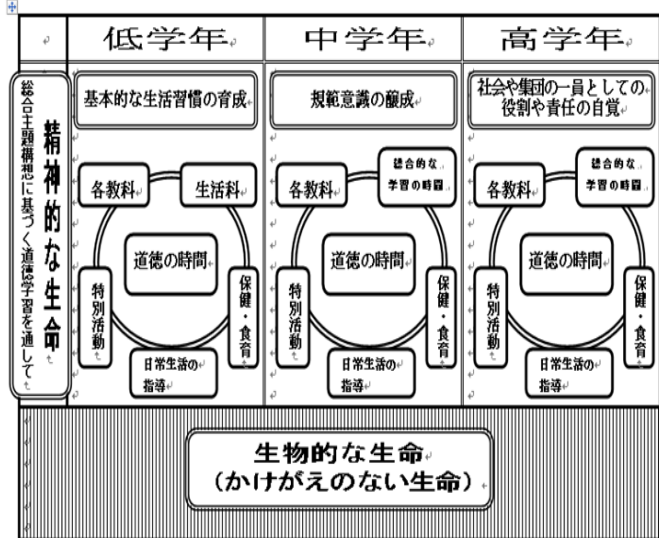
- ・教師の授業力向上を図る学習会を開催する。（新学習指導要領が求める道徳教育と道徳の時間について等）
- ・研究授業、協議会を通じた授業研鑽を行う。（「いのち」を題材にした授業実践 「総合主題構想」に基づいた授業実践）
- ・新学習指導要領に対応した年間指導計画を作成する。
- ・道徳教材の資料分析、資料開発（道徳ノート の導入、道徳教材の共有化等）を行う。

◎教育活動全般にわたる道徳教育の実践

- ・基本的な生活習慣にかかわる指導（メディア調査、ノーテレビ・ノーゲーム運動、健康チャレンジさわやかカードの活用）

- ・食育の指導（栄養士を中心とした食育授業の実践）
- ・動物飼育活動（ウサギやチャボの飼育を通じた「いのち」の教育の推進）
- ・音読活動（「いのち」や「自分」を題材にした詩の創作活動等）
- ・クリーングリーン活動（児童会主催の清掃活動、毎週木曜日に実施）
- ・西单小学校との交流（中国北京市にある友好校「西单小学校」との交流）

★低・中・高学年で取り組む総合主題について



7. 生命の多面的な捉え方

① 支え、支えられている生命 （共存性・共生性）

人間は一人だけでは生きてはいけない、また周りの自然や動物などを無視して、人間だけで存在することはできない。このことを考えてみると共存性と共生性を備えていることが見えてくる。

② はかない、一回限りの生命 （有限性・唯一性）

この生命はいつかは必ず失われるということは分かっている。また、この失われた生命は死んだ後は二度と生き返ることはない。そして他の生命と取りかえるというわけにはいかない。ここには、有限性、唯一性という性質が見えてくる。

③ 自然的、生物学的存在としての生命 （神秘性・偶然性）

生命の誕生を見ると、進化の歴史から見ていろいろな条件が偶然に複雑に絡み合い誕生してきたという歴史がある。また、精子と卵子が受精し、個の生命が誕生することをみると、3～5万匹の中から卵子と受精するのはたった一匹である。そこには自分の存在が偶然的なものであり、神秘的なものであることに気づく。そして、よく存在し得たという誕生の喜びに気づくのである。ここには、偶然性と神秘性という側面が見えてくる。

④ 受け継ぎ、受け継がれている生命 （連続性・継続性）

自分という存在は突然変異的に存在しているのではない。近いところで見ると、その生命は先祖代々受け継がれてきている生命の連続の中に存在しているのであり、遠いところで見ると、有史以来地球に生命が誕生したときから連続している生命の中に存在しているのである。その生命は守り守られて子々孫々へと受け継がれていくものである。このような面は、生命のもつ連続性・継続性という性質が見えてくる。

これらの生命がもつ多面的な性質を発展的、段階的に指導していくことで、児童に「かけがえない生命」に対する畏敬の念を育てていきたい。

そして「かけがえない生命」を自覚するとき、人はこの生命をより一層輝かせていこうとする。人はただ死を迎えるために存在しているのではなく、自分の生命を大切を守り、その生命自体を輝かせていくことができるという面も持ち合わせている。これは人間だけがもつ特質とも言える。この生命を「輝かせていく」ということは、よりよく生きていこうとする生き甲斐や希望に通じるものである。以上のような生命観をもとに指導を行っていく。

8. 動物飼育活動

(1) 動物飼育の教育的意義

昨今、子どもを取り巻く環境が変化し、子どもの体験不足・自然離れなどが指摘されている。こうした状況においては、おのずと生命を軽視したり、生命に対する畏敬の念が薄れたりしていく。また、生き物を極端に嫌ったり、反対に溺愛・偏愛したりする不自然な傾向が見られる。次代を担う子どもたちがこのような様相を示すことは、社会的な問題と受け止める必要がある。

「いのち」への感性は、生命あるものとの直接的な触れ合いによって子どもたちの心に刻まれていく。本来、子どもたちは生き物が大好きである。子どもの心を揺さぶり、生涯忘れえぬ感動を与え、情操を豊かにしていくには、抱いて温かく、目を合わせると反応を示し、その感情を見てとれる動物が大きな役割を果たす。

また、子どもたちは動物を気遣いながら世話をするうちに、自分が動物に頼りにされ、動物にとってなくてはならない存在であることに気付くことができる。単に可愛いがるだけでなく、自分の気持ちと態度が変われば動物の表情や行動も変化し、動物が変容すれば自分もまた変化することを感覚的に理解していくこととなる。こうした相互の関係の中から、子どもたちは自尊感情を得るとともに、自分以外の存在に対するコミュニケーションのとり方も体得していく。

全国学校飼育動物研究会事務局長の中川美穂子氏は、「動物飼育体験の意義」として以下の点を挙げている。(学校・園での動物飼育の成果：緑書房)

- ・ 命の大切さを学ぶ。
- ・ 愛する心の育成を図る。
- ・ 人を思いやる心を養う。
- ・ 動物への興味を養う。
- ・ ハプニングへの対応力を養う。
- ・ 疑似育児体験が行われる。
- ・ 心の緊張を緩める。
- ・ 子どもの心が見て取れる。

自然から離れて人為的な環境の中で暮らす生き物は、人間が心をこめて世話をしなければたちまちのうちに命を失う。命を守り育てるには、

単純な愛情だけで済まされるものではない。昨今、飼い主の勝手な気持ちから愛玩動物を捨てるなどの状況がいたるところで見られる。これは飼い主の愛情の希薄さと自己中心的な態度を物語るものである。命あるものを預かることは、最後まで命を見届ける責任をもつことであり、命への畏敬の念と誠実さが欠かせぬ条件となる。子どもたちに、動物飼育を通して、このことの重要性を認識させることはきわめて大切である。「かわいい」と言って愛情を注ぐことは必要である。しかし、その前に、動物たちが生活している環境を整えきれいにすること、臭く汚い仕事でも嫌がらずに行うことが、動物の生命を守ることである点に気付かせたい。言葉を発して気持ちを告げられない動物たちが、今、何を求めているのかを考えて積極的に触れ合えるようになったとき、子どもたちの心は豊かに育ち、自分に対する有用感と自尊感情が芽生えるものと確信する。



「うさぎと触れあう子どもたち」

(2) 本校の飼育活動

① 学年飼育活動

本校では、現在、飼育小屋で3羽のうさぎと4羽のチャボを飼育している。その世話は4年生に任せられている。かつては飼育委員会がありそこに属する子どもたちが担当していた。しかし、2年前より「卒業するまでに全員に動物と触れ合わせ、教育的な体験をさせたい」との意図から学年飼育に移行した。

4年生は教師の指導のもと、責任感も高まり組織的・自治的に活動できる段階にある。学校が大切にしている動物の世話を任せられることにより、次の高学年における全校的な働きに向けた意識付けと経験に役立つことが期待できる。

具体的には、月ごとに学級担当を分け、さらに学級内でグループ編成されて週単位で飼育に

当たる。子どもたちは登校すると、職員室からかぎを預かり、えさと水やり、小屋の掃除を行う。飼育当番に当たる者は、仕事が終わると動物を外に出して、抱いたり草を与えたりしながら自由に遊ぶ。飼育は授業のある日に行っている。

＜飼育活動の工夫＞

「チェックシート」

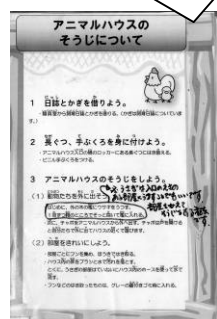
そうじが終わったらチェックシートに記入してもれがないようにしています。

月	日	()	記録者
当番をした人			
飼育・掃除のチェック 【できたものに レの印をつけよう。】			
☐ 長ぐつ、手ぶくろ、マスクをした。 ☐ ウサギを部屋の外に出した。 (無理に外のおりに入れなくてもいいです。えき箱のある入口の部屋に移してそうじをすることでかまいません。ただし、その場合は、ハウス入口の戸を必ずしめておくこと。にげてしまうからです。) ☐ チャボを外で遊ばせた。(外に出たチャボは自分で帰ります。) ☐ それぞれの部屋のフンをほうきで集めてとった。 ☐ とくに汚れているところをブラシや水できれいにした。 ☐ フンやごみをゴミ箱に入れた。 ☐ ウサギとチャボの水入れをきれいにした。 ☐ ウサギのトイレを外の水道できれいに洗った。 ☐ ウサギとチャボに水とえさをあげた。 ☐ ほうき、ブラシ、ホースを決められた場所に片づけた。 ☐ 長ぐつ、手ぶくろを片づけた。 ☐ それぞれの部屋のとびらがしめられているか確かめた。 ☐ カギをきちんとかけた。 ☐ アニマルハウスの外を整とんした。			
ウサギのようす		元気です	元気ではありません()
チャボのようす		元気です	元気ではありません()
次の当番に知らせたいことやお願い			
なし あり ⇒			

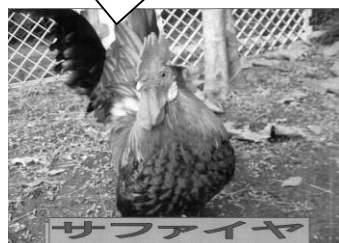


「アニマルハウス」

そうじマニュアルを作成し、誰もがそうじできるようにしています。



全校児童から募集して一羽ずつ名前をつけました。



②土日・休日及び長期休業日の飼育活動

土日・休日については月ごとに担当となる学年を固定し、そのつど事前に当番となる家庭に協力を依頼する。活動は、低学年の児童については子どもと保護者が一緒に行うこととしている。

長期休業日は、全校的に希望調査用紙を配布して行う。飼育を行ってもいいという家庭は、いつの日にできるか、いつの時刻に来校できるか、誰が行うか、を記入して提出する。学校としては、できる限り学年が分散するように決定し、その結果を知らせる。

「保護者への依頼文」

平成20年9月18日

保護者の皆様

中野区立鷺宮小学校
校長 吉本 恒幸

学校飼育動物の世話について (お願い)

保護者の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動に協力いただき、心より感謝申し上げます。

さて、夏季休業中及び9月の飼育活動に対して、多大なるご協力いただきましてありがとうございます。酷暑の中のアニマル当番でしたが、ご家族で取り組んでくださったご家庭も多く、「チャボもウサギもかわいい」「機会があればまたやりたい」とうれしいお話をいただきました。

10月のアニマル当番をお願いしたく、お知らせさせていただきます。4年生以上はお子さんだけでかまいませんが、3年生以下は保護者同伴でお願いします。なお、友達と一緒に行動する場合はその子の氏名を欄内に書いてください。ただし、この用紙はそれぞれ一人ずつ提出してください。御同僚、ご理解とご協力をいただきますようお願いいたします。

記

下記の表の協力いただける日にちの欄に、来校予定時刻と学年・級・名前を書き込み、担任までご提出ください。

締め切りは9月22日(月)とさせていただきます。

10月1日(日)	10月4日(水)	10月5日(木)	10月11日(水)	10月12日(木)	10月13日(金)
学年	学年	学年	学年	学年	学年
氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
学年	学年	学年	学年	学年	学年
氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
学年	学年	学年	学年	学年	学年
氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名

年 級 _____

児童名 _____

保護者名 _____ 印 _____

毎月、たくさんの方々に協力いただき、動物たちの命を守っています。

③年末・年始の飼育活動

本校は機械警備であるとともに、年末・年始は警備員の配置もない。したがってその期間は無人となる。動物たちはその間も生きているのであるから飼育が必要である。子どもや保護者、また教職員も帰省したり旅行に出向いたりするときである。無理に依頼することは避けている。

幸いにも、本校は、地域の方々の教育的支援が日常化している。その関係から、学校近くに住まわれる地域の方々が年末・年始の飼育を代わってくださっている。学校としては感謝に堪えない協力である。

④獣医師の協力

本校近くに獣医師が開業しておられる。動物に異変があればすぐに相談させていただき、適切なアドバイスをいただくことができる。また、動物が亡くなったときは、その扱いをお願いもしている。ボランティアとして診療などをしてくださっているご厚意に感謝している。学校での飼育活動には、獣医師の方々との連携は欠かせない。このことは学校独自に任せることなく、獣医師会と行政機関の課題として解決を図るべき性質のものであると考える。

(中野区立鷺宮小学校 校長 吉本恒幸)